

思い出の恩師千葉先生 一杯のお酌が人生を変えた

小林 領子
こばやし えりこ

一九七四年夏、大通り公園を歩いていると、見覚えのある懐かしい顔にであつた。その人は大学の恩師である千葉萌一郎先生だった。つるつるの頭に、風呂敷包みを抱えひょうひょうとした姿、すぐ先生とわかり「お元気ですか？卒業生の村岡です」とかけよると、「ヤー、君か、お

元気ですよ」と。当時私は、祖母が重い認知症で、母は看病疲れのため緑内障を発症し、家族会議の結果、私

が家事と看護を担うことになり会社をやめていた。立ち話だったので、軽く状況を話し、学生時代の思い出話に花が咲いた。先生は「君は、いつもコンパの時お酌をしてくれた」「今の学生はそんなことをする子はいないよ」とのことだった。別れ際に、何の期待もせず「失業中ですので、どこかあればよろしくお願いします」と別れた。

数週間後、千葉先生から電話があり「ナウカで社員を募集しているので、受けてみないか」とのこと、私は「学生時代はほとんど、勉強もせず、学生運動、クラブ活動であげられ、試験には通らない」と申しあげた。事実、当時大学では、岩沢問題（理事長仕手戦による資産の流用、それに伴う財政の悪化）で大学の存亡の危機をひきずり、大学紛争のあおりでヘルメットすがたの学生による授業阻止もあって授業もほとんど休講。私は、毎日

が日曜日でロシア語のアルファベット順もあやふやな状況で卒業した。そんな学力で試験を受けても、落ちることはもちろん、千葉先生に恥をかかせるだけだと

思った。しかし、先生は「とにかく受けなさい」とのことと連絡先を告げられた。ナウカの試験が始まった。ソビエト大百科からの抜粋を訳せとのこと、全然できなかつた。試験に集まった二〇名ほどの自信にみちた応募者の顔を見て、ひどく落ち込んだ。それから、数日後、「受かりました」とのこと、狐につままれた状態だった。後日、会社の役員に「千葉先生が、『採用して欲しい』の一点張りで何度も迫られ『だめだ』といったら、最後に怒り出しちゃってね」と聞いて千葉先生にはただただ頭が下がった。



注文発送だったが、「女性でもセールズを経験することは大切」と所長から勧められ、内勤業務とセールズを兼務することになった。セールズの市場担当では札幌大学が当てられ、毎週水曜日に訪問した。その際は、必ず千葉先生に面会。そのうちに昼食を毎回一緒にするようになった。私は弁当、先生は少量のパンで一時間、学生時代の思い出、雑談もふくめ楽しい一時をすごさせていただいた。先生は、

必ず熱々の番茶を入れてくれ、私のくだらない話をニコニコと聞いてくれた。とある時、先生が「昔と違い、学生との距離が広がりました」「昔のようなコンパも無くなりました」と寂しそうに話していた。

そんな中、大学で、千葉先生が転び、腕を骨折し、緊急入院との情報を知って、西岡にある岡整形に取り急ぎ見舞いと言った。単身赴任の先生なので、何かお困りではないか、何かお役に立てることがあるかもしれないと思ったからだ。病室を覗くと先生は、病衣姿だったが、いつもと同じくひょうひょうとした姿で、ざら紙（チラシの裏）に鉛筆でなにやら書いていた。先生は私の顔を見るなり「どこで知ったのか、誰にも話さないよう堅く言っておいたのに」とけんもほろろ、しかし、そのうちに打ち解けて和やかないつもの顔になった。そこで、お見舞いをさし上げたところ、頑なに固持された。先生が、一九八三年三月で定年を迎えられ、東京の家族の元に帰られると聞いて、送別会、見送りを準備しようと思われ、送別会、見送りを準備しようと思われ、大学の関係者にきいたところ、帰郷の日程、交通機関の時間などだれにも告げなかったとのこと。まさに、千葉先生の孤高な姿勢が貫徹されたのだと思う。しか

し、先生は、暖かい人柄だったし、学生の面倒もよくみた。自分の過去や家族などの個人情報も聞いたことが無いが、戦前、東京外語でロシア語を専攻し、拓殖大学でロシア語講師、明治学院大学では図書館課長を歴任され、一九六八年札幌大学にロシア語学科教授として着任した。大学ではロシア語史、ロシア語文法を教えるかたわら、名詞の呼格についての研究をつづけられたと聞いている。

私の在学時代には、貝沼一郎、千葉萌一郎、藤井一行、新田実、ワレンチーナ松坂先生らが熱心に教鞭をとられていたが、三年生の時、深水先生、四年生の時に相馬先生、という個性豊かな先生方が新たに赴任され、私たちの学生時代をより思い出深いものにしてくれた。今回、学生時代の思い出を綴る『水源地』の発行で、学生時代を少し思い出すきっかけとなった。最近物忘れも激しくなり、卒業後すでに四〇年ほどたち、記憶も曖昧になっていたが、この機会をつくってくれた関係者に深く感謝している。

余談になるが、私の経験から新人、学生には宴会や飲み会があった場合は、お酒を飲む飲まないは関係なく、乾杯の後、なにはともあれ「先輩諸兄にお酌を」と勧めている。